

男子部中等科・高等科

「表現とは何か」

酒井恒太

「表現とは何か」のチームでは、美術という造形表現行為を手段とし、以下三つの狙いについて学びの機会を得たいと考えた。まず一つ目に、答えのない問いに向かうことである。その過程が重要視される課題こそ、学びの主題として設定するに最適だと考えたためである。二つ目には、学びの入り口として自分自身を設定することである。自らの外に答えを見出すのではなく、内を深く見つめることを必要とすることで、個々の学びにおいて意義を見出しやすく、またその結果自体にリアリティが生まれやすいと考えた。そして三つ目には、自己を深く知ると同時に他者の存在についても考えることである。発表という機会を設けることで、表現が主観的な考えで完結することなく、客観性とのバランスを意識すると考えた。自己理解と他者尊重を通じて、多様な価値観を受容出来る感性を養って欲しい。

個々の取り組みとして、アマディ（中等科3年）は、観察に基づく有機的な立体として量感豊かな塑像を制作した。金（中等科3年）は、自らの思想を展開して、プロセスを重視した作品を平面と立体の両方において試みた。内田（高等科1年）は自身をモチーフに平面と立体をそれぞれ一点一点ずつ、色彩豊かな表現を目指した。西山（高等科1年）は、有機的な曲線と幾何学的な直線を対比させた木工として、カトラリーを二セットずつ制作した。竹川（高等科2年）は木彫として、クスノキの原木に、自らの内面を形象化する試みを見せた。堀内（高等科3年）は、デジタルペインティングならではの透明感と色層による効果を表現に上手く取り入れた。栗田（高等科3年）は、自転車のフレームを研究対象とし、設計と木工による製作に取り組んだ。

展示発表の機会を経ることは、生徒が自己の造形表現における主観と客観のバランスを考える良い契機となる。それは自己の思想を他者と共感できなければ、コミュニケーションとしての表現が成立しないからである。今回の学業報告会における学びは、俯瞰してみれば、多様性への尊重という問題につながっていると信じている。

I. はじめに

前回に引き続き学業報告会の取り組みの一つとして、表現とは何かという研究テーマを設けた。その狙いは主に三つあり、一つには答えのない問いに向かう過程こそ、学びの主題として最適だと考えたこと。二つ目には、学びの入り口として自己を設定することで、個々の学びに意義を見出しやすいこと。そして三つ目には、自己を深く知ると同時に他者の存在について考え、多様な価値観を受容出来る感性を養って欲しかったからである。

そもそも表現といっても、美術における造形表現だけでなく、文学のような言語表現や体操のような身体表現など手段は様々である。手段によってその特性は大きく異なり、表現者にとって自己

の考えを表現するにあたり、いずれの手段が最適か、あるいはそもそも向き不向きといった身体的問題も個々の現実には存在する。一方では、表現とは一つの伝達という可能性を持っている。自己の思想が他者に伝わるということで表現が補完されると考えることもできるだろう。ここにいう伝達とは、他者に頭で理解されることだけを指すのではなく、心の共感を得てはじめて伝達したと捉える意味においてである。

この学業報告会期間を通じて、造形表現が有するこれらの可能性について各々に触れる良い機会となることを切に願った。このため、学びの入り口としての課題の設定は、非常に重要な問題であった。また一口に造形表現と言っても、その方法

は様々である。したがって、平面、立体、形、色、質感、素材、空間、モチーフ、ファインデザインかなどを総合して、生徒一人一人と対話を重ねながら、個々の特性に沿って慎重に課題を設定し取り組む配慮を要した。

II. 活動内容

中等科3年のアマディは、自ら塑造を希望した。動物園で見たゾウの姿を造形したいとのことで、針金や木材、新聞紙を芯棒に彫塑用粘土で造形を試みた。数日かけて制作したその形は、豊かな量感を内に秘めた緩やかな起伏に覆われ、彫刻としての魅力を十分に発揮したものであった。そこで同じ有機的なモチーフとして人の頭部を制作したいという気持ちから、男子部の新井先生をモデルにもう一点制作することとした。完成した作品は客観性を尊重しながらも、他者としての存在である新井先生への主観もバランスよく造形され、見るものにモチーフの内面を感じさせる良いものとなった。



〈よく観察して有機的な形を探っていく。〉

同学年の金は内面、思想、イメージといったテーマで平面と立体造形の両方を希望し、学業報告会期間中に大小3つの作品を制作した。そのどの作品にも共通して、色彩感覚の豊かさが特徴である。彼の制作は色遊びともいえるような行為とライブ感が非常に強く、日に日に画面の様相が変化

するのが特徴である。純粋な姿勢で、常に今の自分の感覚と向き合うことが出来た。特に、廃棄される木製の扉を支持体に試みた表現は、主観をやや重視した嫌いがあるものの、三つの作品の中で唯一、過程に大きな変化を見せたという点で、彼にとって深い学びであったことと感じた。



〈繰り返すイメージの創造と破壊と向き合う。〉

高等科1年の内田は、自分自身をテーマに平面立体造形の両方を試みた。彼はもともと客観的な色や形の描写を得意としつつも、色や形を自由に扱い、内面を表現することには慣れていなかった。勿論、完全な抽象へ表現を昇華する以前に、彼にとって今回は客観性と主観の良いバランスを表現として探ることが大きな課題となった。立体と平面では表現の主とする要素は違うが、彼は特に色に関して自らの学びの入り口とした点で共通している。最初、肌はクリーム色、髪は黒のように、

客観的な色感に基づいて描き始めたが、徐々にそれぞれの色が固有に持つ価値に気が付き始め、その組み合わせによる調和を試みる取り組みが見られた。また形としての描写にも、非現実的なイメージが重なるようになり、最終的な完成では或る種のリアリティをもった表現に行き着くことが出来た。



〈理性と感性のバランスを色に置き換えていく。〉

同学年の西山は木工をテーマに選んだ。今回の学業報告会では、皿、スプーン、フォーク、ナイフ、器とそれぞれを2セットずつ制作した。一つひとつ手作りしたそれらは、個々に違ったコンセプトを元にデザインされており、用途としての機能を有するだけでなく、視覚的な魅力を上手く融合させた。また有機的なフォルムとしての曲線と、幾何学的なフォルムとしての直線を効果的に対比させている。自らの感覚美を日用品に造形し、使う側の鑑賞者とコミュニケーションを図ろうとする作者の狙いが素晴らしかった。



〈色々な形を持つそれぞれの魅力を引き出す。〉

高等科2年の竹川は木彫りに取り組んだ。今回は1メートルを超える楠の原木から、チェーンソーや鑿を扱い、全ての作業を自らの力のみで完成までやり遂げた。自分自身の内面性を少女像として形象化することを試み、原木が持つ有機的で豊かな量感を尊重する素材の扱いに感性が光った。具象と抽象のバランス、色彩の効果も積極的に取り入れ、粗削りながらも素直な造形が、プリミティブな魅力を持つ表現へと繋がった。



〈木の中にあるイメージを確かめながら彫る。〉

高等科3年生の堀内は、デジタルペインティングに取り組んだ。木をモチーフに、デジタルデータを扱うことで可能となる可塑性を生かし、色と形を吟味した。またデータの透明度を操作し、最終的にレイヤーとして重ねることで、デジタルペインティングならではの、軽やかで奥行きを感じさせる色層表現へと展開した。

同学年の栗田はプロダクトデザインとして木工の自転車に取り組んだ。正確な図面を作成するところからスタートし、材料となる木材の樹種選択から、木場への買い付けまで徹底した姿勢を見せた。本来であれば物理的強度と重量の問題から、一般的にカーボンや軽金属が素材として選択されるフレーム部分だが、今回はあくまでデザインの試作として形を得ることが主眼に置かれたため、環境的要因から木工で製作することを選んだ。大まかな製材には大型加工機械を使用し、細部や三次元的な曲線や面を得るには手仕事という様に、両面からのアプローチが要求される高度な作業となった。時間的制約が最も大きな問題となり、完全な完成までは届かなかったものの、イメージした形を現実として再現し、車体を組むところまでもっていくことが出来た。製作の過程では何度も困難に直面する姿が見受けられたが、軌道修正しながらきちんと最後まで取り組めたことが、何よりも彼にとって尊い経験となったことと感じた。



〈設計をしながら部材を製材していく。〉

Ⅲ. 展示発表

学業報告会当日では、展示発表をおこなう運びとなった。そのための事前準備として、前日に作品のレイアウトについて、みんなで検討した。その際に、平面と立体、色彩、サイズ、モチーフなど個々の作品がもつ個性を大切に、互いの作品が空間全体に良いバランスと調和をもたらすよう、空間への配慮も同時に学んだ。特に大きな作品と小さな作品では、空間における役割が違うことに気付けたことは大きな収穫であった。

当日はそれぞれの生徒が作品の傍に立ち、多くの来場者が見える中、一人ひとり丁寧に、自らのエピソードを共有する姿が見受けられた。その中

で、自分の作品に対する意外な見え方や感じ方など、他者の感覚や価値観を改めて知る良い機会となったことと思う。



〈それぞれの個性が光る会場風景。〉

Ⅳ. 出品作品一覧

【中等科】

〈三年〉

「象」／塑造	(アマディ 雅廉)
「肖像」／塑造	(アマディ 雅廉)
「頭像」／塑造	(金 甫)
「絵画」／アクリル	(金 甫)
「扉」／アクリル	(金 甫)

【高等科】

〈一年〉

「天国と地獄について考える。」／塑造	(内田 颯)
「オカシについて考える。」／アクリル	(内田 颯)
「北欧チックなカトラリー」／木工	(西山 馨)

〈二年〉

「息吹」／木彫	(竹川 真幸)
---------	---------

〈三年〉

「Wooden Bike」／ミクストメディア	(栗田 匠)
「野花と木」／デジタルペイント	(堀内 和大)

Ⅴ. おわりに

造形表現は作るだけで完結してしまうと、もう半分の大きな学びの機会を失うことになる。それは発表することを通じて、客観性とのバランスを考える良い契機となるからだ。それは言い換えれば他者の存在を意識し、その多様な価値観を同時に、自分の作品が受容出来なければならない問題への直面でもある。しかしながらそれは、同時に自分の表現も他者に受け入れられなければならないということでもある。つまり主観と客観のバ

ランスを考えるとということが、俯瞰してみれば、多様性への尊重という学びに繋がっていると、指導者として確信しているところである。

また自分の作品を発表するという事は、自己の思想を他者へ伝達し、コミュニケーションとしての成立を目指す行為でもある。それは、自分から独立した一つの小さな世界を生むことと同義であり、人が出来得る何よりも尊い行為の一つではないだろうか。表現は決して独り言に終わってはいけないということを、生徒には十分に理解してほしい。それは、表現者は自らが生み出すものへの責任を常に背負っているということにおいてである。



<首像／塑造(アマディ 雅廉)>



<絵画／アクリル(金 甫濬)>



<象／塑造(アマディ 雅廉)>



<天国と地獄について考える。／塑造(内田 颯)>



〈野花と木／デジタルペインティング(堀内和大)〉



〈頭像／塑造(金 甫濬)〉



〈息吹／木彫(竹川 真幸)〉



〈扉／アクリル(金 甫濬)〉



<北欧チックなカトラリー／木工(西山 馨)>



<Wooden Bike／ミクストメディア(栗田 匠)>



<オカシについて考える。／アクリル(内田 颯)>